

アルジェリアから見たアラブの民衆革命 ー独立50周年目を迎えたアルジェリア訪問から

東京国際大学名誉教授

宮治 美江子

1. はじめに

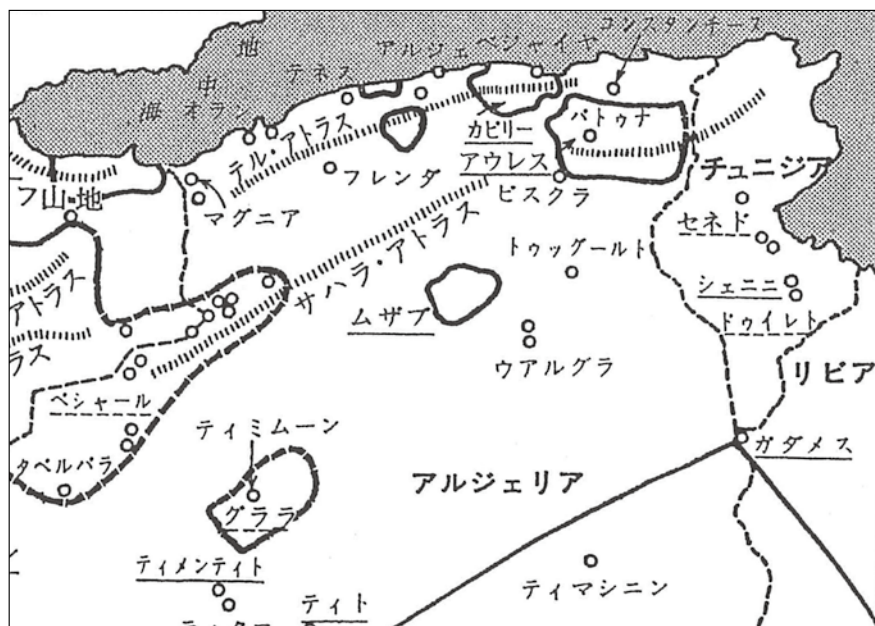
今年1月16日夕方の報道に始まるアルジェリア南東部のリビアとの国境に近い砂漠のアイン・アナメスの天然ガス関連施設で起きた人質・殺傷事件は、日本企業の日揮も大きく関わる事件であった。北アフリカにおける日本企業の、例えばアルジェリアの独立以降のこれまでの40年以上にわたる、深い経済的関わりをほとんど知らない日本国民にとっては、大きな衝撃を与えることとなった。とりわけ10人の日本人犠牲者を出したことの社会的影響と人々に与えた心の痛みは大きい。

私が1968-69年に1年半家族とともにアルジェリアに滞在した時には、在アルジェリア日本人は、大使館員のご家族を入れても20人ほどであったのが、1974-75年に文部省の科研の調査で、テル・アトラスのカビリー地方のフランスへの出稼ぎ村の調査をした時には、南のサハラ砂漠のハシ・メサウドやハシ・ルメル等の大規模な油田開発が進展し、西のオランに隣接する海岸沿いのアルズーなどに石油精製所がすでに、建設されており、日揮もこの事業にかかわっていた。日本人の数もサハラの施設には2500 - 3000人という話もあった。工業革命の旗印の下で急速な工業化を進める

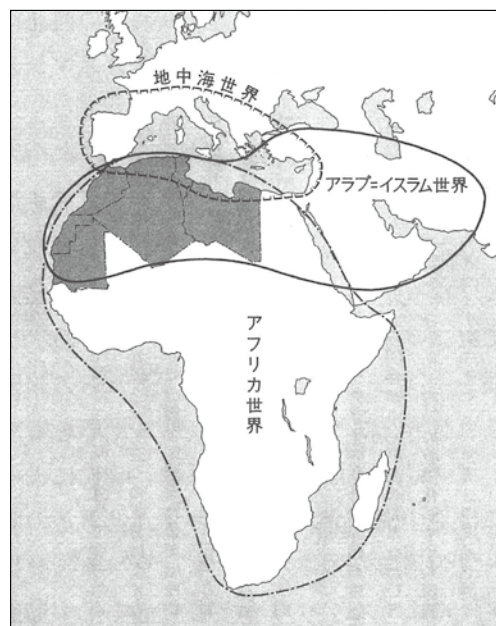
アルジェリアの政治・経済政策とともに、5000人を超える日本人が滞在し、日本人学校もできていた。しかし当時はまだ、アルカイダなどの存在すらなかった時代でもあった。

今回また、日本学術振興会の科研のプロジェクトのお蔭で、2012年に独立50周年を迎えたアルジェリアに、11月1日の革命蜂起58周年記念日に7年ぶりに訪れ、同国の政治・経済的趨勢や国民生活の現状等を観察したり、現地の研究者たちと意見交換をすることができた。川田司大使にもお目に掛り、また、日揮の横浜本社のアルジェリア事業部の木田氏のご紹介で、日揮のアルジェ支所の山本所長や水品元所長ともお話しする機会を持つことができた（それだけに上記の事件は私自身にも大きな衝撃であった）。

アルジェリアに着いた11月1日の夜、ホテルのテレビのニュースで、ブーテフリカ大統領が、国防軍を閲兵し、内外の要人たちはもとより、いわゆる旧ムジャッヒディーンやムジャッヒダと呼ばれる、かつての国民解放軍の男女兵士たちと、人民宮殿（迎賓館）で歓談する様子が映しだされていた。しかし、とりわけ印象深かったのは、その夜から10日間の滞在中、毎夜のように、独立戦争当時の様子を映す映画やドキュメンタリーが放映されたことである。900万人の現地人人口の内100万人近い犠牲者を出したとさ



(地図1) アルジェリア北部地図



(地図2) 三つの世界とマグリブ
「宮治一雄 2008, P.14」

れる過酷な戦争を戦い抜き独立を勝ち取ったアルジェリア国民の勇気と並々な努力には、改めて深い感銘を受けた。こうしたテレビ番組には、戦争を知らない世代への歴史伝達の強い意思を感じた。

2. アルジェリア民主人民共和国の概況

1) 地理：

アルジェリアは、アフリカの北部の、中東・イスラーム世界では、マグリブ（日の沈む地）と呼ばれる、西アラブ地域のほぼ中央にある。地理的にみれば、北を地中海、東は大西洋に接し、中央を東西に走るアトラス山脈（地中海側のテル・アトラス、南のサハラ・アトラスの二つの支脈がある）が位置し、南には広大なサハラ砂漠が広がっている。

この海と山、砂漠の3要素が地域の気候（特に降雨量）に大きな影響を与え、それが、植生、人口、人々の生活様式の多様性をもたらしている。

2) 現在の国勢：「外務省各国地域情勢」より

（表1）アルジェリア民主人民共和国

面積	238万平方キロメートル、アフリカ第1位
人口	3542万人（2010年、世銀） 国土の7%以内に集中
首都	アルジェ（エル・ジャザイール）
民族	アラブ人（80%）、アマジグ（ベルベル）人（19%）、 その他（1%）
言語	アラビア語（国語、公用語）、アマジグ語（タマジグト、国語）、フランス語（準公用語）
宗教	イスラーム（スンニー派）
政体	共和制（二院制）
元首	ブーテフリカ大統領（1999年4月～）
首相	アフメド・ウーヤヒア（2008年6月）
外相	ムラド・メデルチ（2007年6月～）
主要産業	石油・天然ガス、第二次産業
一人当たりGNI	4660ドル（2010年世銀） 失業率：10.0%（2010年アルジェリア情報統計センター）
通貨	アルジェリアン・ディナール（D.A.）
為替レート	100円＝82.9ディナール（2013年3月）

（表2）マグリブとアルジェリアの概史

B.C. 814 146	G	フェニキア人、カルタゴを建設 ローマとカルタゴの勢力争い
A.D. 429 533	G G	ヴァンダル人、スペインからマグリブに侵入 ローマ人をマグリブから駆逐 ビザンツ帝国、マグリブ征服
642 670 776 788 800 1062 1145	L T A M T M M	アラブ・イスラム軍、キレナイカ占領 カイラワーン建設 ルスタム朝、中部アルジェリアにおこる イドリース朝、モロッコ支配 アグラブ朝、チュニジアを支配 ムラービト朝、マグリブ統一 ムワッヒド朝、イベリア半島まで勢力拡大
1516 1553 1565 1631 1705	A M LT M T	オスマン帝国、アルジェ占領 サアード朝、モロッコ全土を支配 オスマン帝国、リビア支配・チュニス攻略 アラウィ朝おこる フサイン朝おこる
1830 1881 1911 1912	A T L M	フランス軍、アルジェ占領 バルドー条約、チュニジア、フランスの支配下に入る イタリア、リビアを領有 フェス条約、モロッコ、フランスとスペインの支配化に入る
1951 1956 T 1962	L M T A	リビア独立 モロッコ独立 チュニジア独立 アルジェリア独立

マグリブ諸国年表 G＝マグリブ全体 A＝アルジェリア L＝リビア
M＝モロッコ T＝チュニジア

3) 歴史の概略—文明の十字路：（表2参照）

北アフリカは、大変古くから人類が生活していたことが考古学的調査からわかっており（アルジェリアのオランで、50万年—30万年前のアトラントロプス・アフリカヌスの骨の発見）、後期旧石器文化のカブサ文化（紀元前8000—2000年）の担い手たちは、現在の北アフリカの先住民族のアマジグ（ベルベル）系住民の直接の祖先と考えられている。紀元前1200年頃、北アフリカの海岸にやってきたフェニキア人が出会った人々は彼らの子孫である。その後、現在のチュニジアの首都チュニスの北東の海岸沿いにフェニキア人が、都市国家カルタゴを建設（前814年）した。カルタゴはその後、統一国家をつくったヌミディア（アマジグ人の諸部族連合国家）との争いにローマが干渉した第3次ポエニ戦争（前149-46年）で、ローマに敗れ、

その後北アフリカ地域一帯は、ローマの属領アフリカとなり、次々と都市が建設された。紀元後429年には、スペインからヴァンダル人が侵入、ローマ人を追い出して支配を確立。533年には東から侵略したビザンツ帝国がマグリブを支配した。

やがて、7世紀前半にアラビア半島に誕生したアラブ・イスラーム国家の征服軍が642年にはリビアのキレナイカ半島に達し、7世紀にはマグリブ各地を征服しつつ、711年にはイベリア半島に達している。マグリブにはいくつかのイスラーム国家が興亡したが、1516年にはオスマン帝国がアルジェを占領し、アルジェリアとチュニジアはオスマンの属領となり、オスマン系の王朝がフランスの侵略まで続いた。

3. フランスによる植民地化以降の歴史 [1830-1962]

1) アルジェリアの植民地化

(産業革命以降のヨーロッパ諸国の覇権争いとアフリカの分割)

アルジェリアは1830年の仏軍の武力攻撃でオスマン帝国系のデイ太守が倒され、地中海側の北部はフランスの県の一つとして、南部はフランス軍管区として、同化政策を中心とする徹底した植民地支配を受けることになった。

2) アルジェリアの民族主義運動の系譜

アルジェリアの植民地支配体制は、フランス本国の植民地支配とフランス系入植者（コロン）によるアルジェリア人支配という二重構造の下にあった。

アルジェリアの民族主義運動の系譜には以下のものを挙げることができる。

1. 植民地支配への武力闘争：アブドゥル・カーディルの抵抗運動（1832-1847）
2. イスラーム原理主義的民族主義：イブン・バディーヌによるウラマー協会設立（1931）
民衆の民族意識の覚醒に貢献、やがて後のFLN（民族解放戦線）に合流
3. リベラル近代主義的民族主義：20世紀初頭の青年アルジェリア人運動、ムスリム議員連盟設立（1927）をへてフェルファト・アッパースによる「アルジェリア人宣言同盟」（1946）植民地体制化での参政権拡大を目指し、やがてFLNに合流した。

3) 独立戦争

第2次世界大戦後アルジェリア民族運動は活発化した。自治についてコロンのアルジェリア人支配の権利は拡大したが、アルジェリア人の権利は改善されず、そうした状況打開のためにFLNが結成された。民族主義左派「北アフリカの星」（1926）を受け継ぐ「民主的自由の権利のための運動」（MTLD、1946年）をベン・ベッラらが結成。

第2次大戦後の、戦勝記念日の1945年5月6日は、セティフとゲルマの植民者側の挑発と現地人の暴動、それを口実とする植民地側の大量虐殺事件へと発展した。その後の状況はますます悪化し、1954年11月1日の革命蜂起（6人の英雄）は、民衆の支持を得てFLNは諸勢力を結集した。マシュ將軍率いるフランス軍の掃討作戦に対するゲリラ作戦など、過酷な戦いの後に、1961年にドゴール大統領率いるフランス政府とエヴィアン協定を締結し、1962年7月3日に独立を達成する。

4. 独立以降の歴史

1) 1963年9月の憲法制定以降

FLNの一党制が確立し、ベン・ベッラ（1962-64年）が初代人民共和国大統領に選出されたが、ベン・ベッラへの権力集中は反発を招き、彼はその後の権力闘争に敗れて退陣し、1965年6月国防相（元民族解放軍の大佐）フアリ・ブーメディエンが無血クーデタで大統領に就任した。

2) ブーメディエン大統領時代（1965-78年）の3つの革命

農業革命：自主管理農場を中心とする農業改革

工業革命：豊富な石油資源に支えられ、重化学工業を中心とする工業化の推進

文化革命：文化伝統の中核としてのイスラームの国家統制とアラビア語化政策の推進

この間、1963年憲法は、廃止され、73年に国民憲章、78年に新憲法が採択された。

イデオロギーとしては、民族主義からアラブ・社会主義への移行を目指したが、その実験は、自主管理農場の失敗など、成功せず、開発主義へ向かうことになる。

3) シャドリ・ベン・ジュディド政権 (1979-1992 年)

下での民衆運動

ブーメディエン大統領は1978年12月に病死し、シャドリ・ベン・ジュディド将軍が大統領に選出され、開発主義を新たな軌道に乗せ、経済的離陸を図ったが、石油依存の重化学工業優先策により、国民の生活は改善されず、人々の多様な不満から民衆運動が多発した。

1. 1980年春のタフスト・イマジゲン (アマジグの春) 事件

アマジグ語 (ベルベル語) による表現の自由を求めたティジ・ウズ大学の学生によるデモと大学封鎖からカビリー地方の労働者を巻き込むゼネストと軍による弾圧。

2. 1984年11月のイスラーム法に基づく家族法制定 (一夫多妻や夫からの一方的離婚を認め、財産の相続は女性は男性の2分の1) に反対して1981年頃から複数の女性団体のデモや反対行動が行われていた。

3. 1988年10月4日～10日にかけてのアルジェリア全土におよぶ大暴動

石油価格が80年代中頃から暴落し、累積債務問題が深刻化し、輸入に依存していた食糧や日用品が不足、加えて若年層の失業問題 (20%) 等から人々の不満が爆発したが、経済的要求に留まらずFLNによる1党独裁や政治腐敗への批判に発展。

4) シャドリ政権下での民主化への動きとイスラーム勢力の急成長

シャドリは政治改革を約束、大統領再選、1989年2月の新憲法により複数政党制へ軍とFLN党の分離と、1990年4月の情報法により、国家・党から分離したマスメディア、とくに定期刊行物の自由な発行が認められた。

1990年6月12日に独立後初の自由立候補制で地方選挙が実施され、イスラーム救済戦線 (FIS) が圧勝。1991年12月には国政レベルの第1回選挙が行われ、またFISが圧勝した。翌年1月の第2回選挙を待たずにFISによる内閣誕生が確実になり、92年1月シャドリ大統領は突然辞任。軍部は議会を解散した。

5) 軍部による事実上のクーデタとイスラーム勢力の弾圧による内戦の幕開け

軍部はモロッコにいた革命蜂起の6人の英雄の最後の一人であった元FLN幹部のモハメッド・ブーディアフを国家高等委員会 (HCE) の議長 (大統領代行) の地位に据えた。FLNを含むすべての政党がこの措置に反対する中で、FISの幹部と活動家の逮捕、急進イスラミストと憲兵隊の衝突などが全土に亘る暴動へと波及し、2月9日にHCEは独立以来初めての非常事態宣言を発令し、FISは非合法化され、FIS指導下の地方議会も解散され、HCEの任命する執行代理がおかれた。6月には、ブーディアフが暗殺され、その後、93年2月には非常事態体制は無期限に延長され、軍部の弾圧とAIS (FISの軍事部門) やさらに過激なイスラーム軍事集団 (GIA) のテロによる反撃という10年間で15万人以上の犠牲を出すという、「失われた10年」の時代に突入していく。

6) 1994年1月末、HCEはその代表のゼルアルを大統領に選任

HCEの代表であるゼルアル大統領はテロを厳しく弾圧すると共に、諸政党との対話を試みたが、内戦状態は続いた。

ゼルアル政権は、1996年11月国民投票を実施 (ボイコットする政党も多かった)、憲法を改正して、議会に二院制を導入するとともに、第二院の国民評議会は構成員の3分の1が大統領によって任命され、大統領の権限の強化が図られた。この憲法では、国民のアイデンティティの構成要素として、イスラーム性、アラブ性ととともに、アマジグ性が認められた。

7) 1999年アブデルアジズ・ブーテフリカ (ベン・ベッラ時代の外相) が大統領に就任

全野党が不正選挙とボイコットする中で、与党FLNの候補者として、34年ぶりの文民大統領として選ばれた。2001年のカビリー地方での「血の暴動」を経て2002年にはタマジグト (アマジグ語) がアラビア語とともに国語として議会に承認された。

ブーテフリカはシャドリやゼルアルの始めた社会主義経済から市場経済への開発主義路線を引継ぎ、EUとの協力協定 (2001年) を結ぶ。2003年にはFISのリーダーたちを釈放したため、彼らは武装闘争の中止を呼びかけた。2004年4月には大統領の再選を果たし、フランスとも戦略パートナー協定を結ぶ。その間石油や天然ガスの価格の

高騰により累積債務問題を解決し、「経済振興特別計画」(2001-2004)に取り組み、2005年には、500億ドルをかけて「経済成長促進計画」の5ヶ年計画を策定し、東西高速道路に50億ドル、住宅建設に125億ドルの支出を決めた。また、2006年に実施された「平和と国民和解のための憲章」などによる国民和解政策を推進する一方、テロ対策にも努める。

ブーテフリカ大統領は与党の協力の下に憲法を改正(2008年)、2期10年の大統領の任期を3期にまで延長。2009年に3選を果たし現在に至る。2010年には、大学の研究者たちが国外のシンポジウムなどに参加するのを禁じる大統領通達が出され、これには反対運動が起こり、通達は取り消されたこともある。

2011年には、アルジェリアでも物価高騰を原因とする騒乱が各地で起き、ブーテフリカが批判されたが、同年2月には19年に亘る非常事態宣言を解除。治安もだいぶ回復したとされていた。しかし、最初に述べた今年1月に起きた外国人の人質・殺人事件は同国の治安状況に対する不安材料となっている。

2012年12月18、19日フランスのオランド大統領がアルジェリアを訪問、過去の歴史の中でフランスがアルジェリア国民に被害を与えたことを認めつつも謝罪はなかった。

5. アルジェリアから見たアラブ革命

アルジェリア訪問に際して、アルジェリア人研究者たちにアラブ革命の影響を聴くとあまり影響はないという、なぜだろうか？

- 1) アルジェリアでは1988年にすでに全国的規模の暴動を経験済みであり、その他にも、いくつかの民衆による抗議行動を経験し、民主化への動きが徐々にではあるがすでに始まっている。
とりわけ1990年の選挙における複数政党制への移行の結果としてのイスラーム政党の圧勝、それによる長期の内戦で15万人以上の犠牲を出したことの教訓がある。
- 2) チュニジアのような、ベン・アリの独裁政治の下での徹底した言論統制、イスラーム政党の非合法化(一時

期FISを非合法化した)、独裁者一族への富の集中などはない。

- 3) チュニジアやエジプトなどアラブ諸国での「アラブ革命」の推移の観察。

研究者たちに言わせると、チュニジアのような突発的な、組織化されない暴動は革命ではない。革新勢力はまだ組織力をもたず、結局一番組織力のあるイスラーム政党のナハダ党が、第一党をしめるなど、保守勢力が力を得る結果になっていると批判する。

アルジェリアでは独立以来国家予算の4分の1を教育に費やしてきた結果、国民の教育レベルが上がり、大卒の失業問題は深刻だが、人々の政治意識は明らかに高まり、社会が大きく変化しつつある。

- 4) 一方では、欧米の掲げる「民主主義への戦い」に対する不信感が根強い

- 5) 石油・天然ガスの自然資源に恵まれながらも、経済のグローバル化の中で、欧米などの先進諸国による経済的支配の影響は受け続けている。

6. 今後の見通し

他のアラブ諸国に比べれば、比較的汚職も少ないといわれ(現地の大使館の情報)経済格差(地域格差や階層格差)もそれほど大きくはなく(といってもやはり格差はあり富裕層もいる)、表現の自由などもある程度はあり、政府側も民主化を考慮せざるを得ない状況にはある。

しかし、国内的にも政治・経済状況はまだまだ不安定であり(複数政党制の結果現在50にも及ぶ政党があり、なかなか意見がまとまらず、その結果またFLNが力を得ており、軍部の影響力も大きい)、若年層の失業問題や、家族法をめぐる女性の地位改善問題、民族問題なども続いており、今後さらにアルジェリアに適した「民主的な」政治・経済体制などを模索していく状況が続くだろう。

さらに、対外的には、今回の日揮事件にもみられるように、周辺諸国における政治状況(マリの状況と連動するイスラーム・マグリブ諸国のアルカイダAQIMの動きも含む南部での不安定要素や、西サハラをめぐるモロッコ

との対立など)の影響や、中東・アフリカ諸国の変化やグローバルな政治・経済的状況の影響の中で、いかにアルジェリア独自の戦略的立場を作り上げていくかが、課題である。

今回の人質事件でアルジェリアがテロ集団との取引をせず、すぐに軍事行動に出たことへの批判があったが、この事件は明らかに、アルジェリアの主権に対する侵犯であり、この事件を理由に欧米諸国や国際組織がさらに介入することに対する警戒が強かったことも確かであろう(日本アルジェリア協会の理事をされている日揮の小野輝政氏から、アルジェリアのエネルギー相が、日揮はアルジェリアにとってはファミリーのようなものだからと話されたこと伺ったことから、アルジェリア政府にとっても苦渋の決断であったことも伺える)。

2013年2月9日 科研研究会報告

参考文献

淡徳三郎著

『アルジェリア革命-解放の歴史』刀江書院、1972年

宮治一雄著

『アフリカ現代史Ⅴ:北アフリカ』山川出版社、1989年(1978年初版)

宮治一雄著

「第6章アルジェリアの国家体制」『「イスラム原理主義」とは何か?』山内昌之編、岩波書店、1996年

宮治一雄・宮治美江子編著

『マグリブへの招待-北アフリカの社会と文化』大学図書出版、2008年

私市正年編著

『アルジェリアを知るための62章』明石書店、2009年

宮治美江子

「日の沈む国から-現代アルジェリアの女性たち」『閉ざされた世界から』pp.221-264、世界の女性史第14巻板垣雄三編、評論社、1978年

宮治美江子

「タフスト・イマジーゲン(ベルベルの春)?-アルジェリアのベルベル人問題」『文化人類学2:特集-民族とエスニシティ』pp.166-180、

宮治美江子

「アマジグ Amazigh-言語と文化の尊厳とアイデンティティを求めて」『世界の先住民族:04中東』pp.30-58、

明石書店、綾部監修、松井・堀内編、2006年

ベンジャマン・ストラ著・小山田紀子・渡辺司訳

『アルジェリアの歴史-フランス植民地支配・独立戦争・脱植民地化』明石書店、2011年

渡辺伸著

『アルジェリア危機の10年-その終焉と再評価』文芸社、2002年

写真1: 2012年11月1日アルジェリア革命蜂起58周年記念日のエル・ムジャヒド紙

写真2: 民族主義運動の指導者たちと初代大統領ベンベッラ(左下)「淡徳三郎1972」より

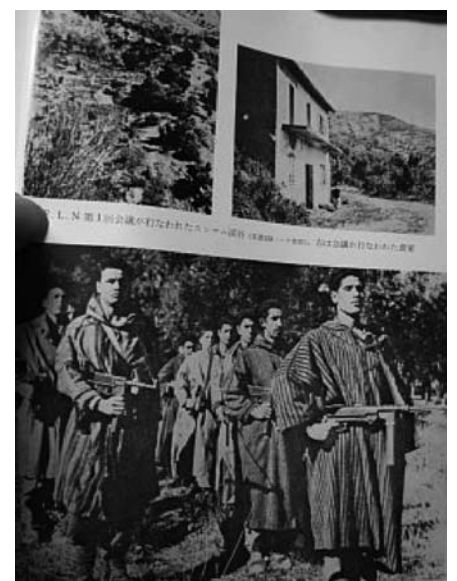
写真3: FLNの第一回会合の行われた渓谷と農家、下は



(写真1)



(写真2)



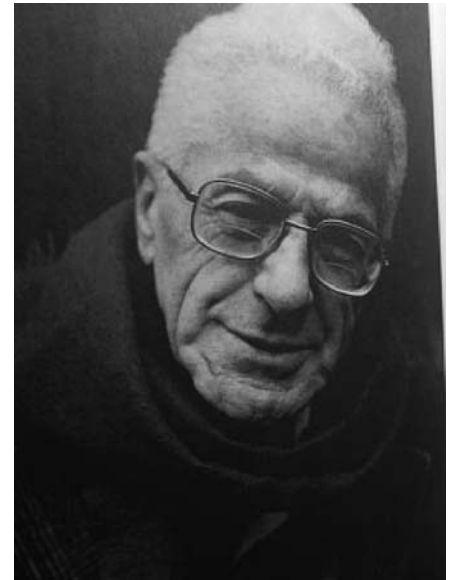
(写真3)



(写真4)



(写真5)



(写真6)



(写真7)



(写真8)



(写真9)



(写真10)



(写真11)

革命軍兵士「淡徳三郎 1972」より

写真 4： アルジェリア革命蜂起を起こした英雄たち、6 人の FLN の各地域代表で、1954 年 10 月 24 日の左写真の家での秘密会議の後撮影された「淡徳三郎 1972」より

写真 5： 第 2 代大統領、フアリ・ブーメディエン

写真 6： アマジグ (ベルベル) 文化の象徴的存在だったムールード・マムリ CRAPE 所長

写真 7： カビリー地方の中心にあるティジウズ大学構内の案内板、アラブ語、アマジグ語、フランス語で書かれている (2005)

写真 8： カビリーのベニ・ドゥアラのファジア・シェナヌと (2005)

写真 9： 1981 年、村のファジアの母親の家で、妹親子も一緒に

写真 10： 2012 年、ファジアと息子のお嫁さんたちと孫



(写真12)



(写真13)



(写真14)

写真 11：1974-5 年の本格的村の調査の時に寄宿した、ベニ・ドゥアラの市役所の助産院で助産婦さんたちと

写真 12：同助産院で出産した子供を見せにきた村の女性と助産師さんたち

写真 13：調査した出稼ぎ村の現在、出稼ぎ者たちが故郷の村に建てた家々

写真 14：村の花嫁さん（左の女性是她の右の叔父の妻の中国人で、二人はパリに暮らす）